

◆連載

いま留萌むかし 第七話

●原敬と留萌

時の内務大臣原敬が留萌を視察したのは、明治四十年である。

その頃、留萌・増毛の築港が一つの政治問題として表面に浮き上がり(明治三十九年)、留萌・増毛どちらが適地であるかを決定する重大な時期だった。政党のぶつかり合いが激しさを増した時代でもあったため、留萌には政友会、増毛には野党がついて、日に日に争いがひどくなつていく。

また貴族院内での論議は甲乙つけがたいもので、いつ結果が出るのかさえはつきりしない状態だった。

原の心の中ではすでに決まっていたが、背後地との交通連絡(三十四年、峠下―沼田―北竜―妹背牛間が開通して、これから札幌につながる)の優劣を決定づける資料を得るために明治四十年八月、留萌・増毛の現地視察へと向かう。その時の随員は水野鍊太郎、

安達謙三(政治家)、広井勇

るものにて、増毛湾は不可な

(東大教授かつ内務省技師)、河島醇(案内役北海道長官)、

きも陸と連絡を保つこと難く、

他十三名。小樽まで五十嵐億

鉄道の如き急勾配にて且つ迂

太郎が出迎えた所有船「三省

丸」に乗り込む。同年八月十日の午前九時、増毛に着き、

すぐに上陸して市街を一巡した。町有志たちが開いた歓迎

会である。この日記の中

会で昼食をとり、再び乗船して留萌には一時間ほど着く。

たものである。この日記の中には留萌築港算のことが書

小船に移り汽船に引つ張られながら留萌川を一里余りもさ

かれています。この頃(明治三十九年十二月二十八日)に、

かのぼつて視察した後、園田商会(栖原支店)に投宿する。

第二十三議会が開かれた。四

「此川は水深もあり且つ屈曲甚だしく流緩にして又、土

砂をながすこと少く頗る利多

砂をながすこと少く頗る利多

港湾は小樽だけの計画でその他の港湾は次回にまわされた。

の如き川は他に之なしと云う。

留萌と増毛の築港立地の比較評価は、すでに明治二十年

増毛・留萌は貴族院に於て問題しなり、遂に留萌築港予

算は否決となりしも、是れ固

ろう派が一種の感情によつて余に当らんとせし小策に外な

断は決まっていたものと考え

られる。

明治四十年当時、強力な実

権を握っていた大政治家原敬

の現地視察と、億太郎や留萌

の現地に、たくさんの人々の思

意で、やがて留萌港は開港す

いをしみこませ、現在に至つ



明治40年8月留萌港湾建設視察に来留した当時内務大臣の原敬と其の一行(留萌川口) 五十嵐家所蔵



原敬